

次郎長

次郎長翁を知る会
会報 第24号
平成21年3月31日発行
発行所 〒424-0821
静岡市清水区相生町6-17
(財)静岡観光コンベンション協会
清水事務所内
TEL (054) 352-7331
発行人 竹内 宏
編集人 田口 英爾
印刷所 (株)ニシガイ
TEL (054) 352-2188

お茶輸出百五十年 — 次郎長は

徳川幕府が重い鎖国の扉を開いたのが百五十年前。お茶輸出第一号はその年、安政六年（一八五九）に始まった。明治維新、渡世人から大変身した次郎長が、富士の裾野を開墾し、横浜への蒸汽船ルートに懸命となったのはお茶輸出のためだった。

今年がわが国お茶輸出百五十年の年である。安政六年（一八五九）、幕府は鎖国の扉を開き、諸外国と通商条約を結ぶ。開港したのは函館、新潟、横浜、兵庫、長崎の五港である。

お茶は主として米国向きに横浜から緑茶が積み出された。安政の大獄や尊王攘夷運動をよそに、横浜には外国商館が立ち並び、駿河や伊勢から運ばれた荒茶を、外国向に再加工するお茶場で賑わっていた。

次郎長といえば、前年安政五年の暮、旅先の名古屋でおちよう（初代）を失い、仇の久六を追っかけまわしていた頃だ。

その頃、長崎油屋町の茶商の家に生まれた大浦慶が外国商館に嬉野産のお茶を見本に送ったところ、安政六年、ウィリアム・オールトから一万斤（六〇〇キロ）の大量注文があり、これが日本茶輸出第一号という。ウィリアム・オールトは土佐

藩相手に武器や船舶を売りつけた英国商人だ。その居宅跡は長崎グラバー邸内に残されている。

五港開港の安政六年、初年度の輸出額四〇万ポンドで始まった茶輸出は、九年後の慶応三年（一八六七）には二十倍を超える九四五万ポンドを記録する。

明治開花の横浜。お茶輸出はますます盛んになり、夜が明けてガス灯が消えると、女工たちは先を争って「お茶場」に駆けつけた。女工哀歌ならぬお茶場哀歌が生れた。

野毛山の鐘がゴンと鳴りやガス灯が消える
早く行かなきゃカマがない

後からのこのこ行ったのでは、お茶場の釜が先取りされて、その日の仕事にあぶれるというのである。

明治新政府にとって、外貨稼ぎの二本柱は、生糸とお茶。全国一の生産量を誇る静岡茶は、清水

港から横浜に運ばれ、再加工してアメリカへ積み出される。

さて、その頃の日本茶がアメリカでどのように飲まれていたか。今から十年前、東京大学社会科学研究所助手のロバート・ヘリヤ氏が文芸春秋誌の随筆欄に「一八六〇年代から七〇年代頃」シカゴを中心とした中西部の人たちは、コーヒーメーカーで沸かした日本のお茶に、たっぷりのミ

外国商館内の製茶施設はお茶場と呼ばれた。左奥が釜茶（パン・ファイヤード）、右手前が竈茶（バスケット・ファイヤード）。明治18年の錦絵「皇国製茶図絵」静岡県立中央図書館提供



ルクと砂糖を入れて楽しんでいたのです」と明快に記している。

「日本茶とアメリカ人」の歴史を証言したこのロバート・ヘリヤ氏は、他ならぬ百五十年前、大浦慶から日本茶を買付けたウィリアム・オールトの子孫なのである。しかもロバート氏の高祖父フレデリック・ヘリヤはウィリアム・オールトの事業

を引き継ぎ、シカゴに本社を置く「ヘリヤ商会」を立ち上げ、神戸と横浜支店でお茶の買付けと再製管理を行った。ヘリヤ商会はジャーデン・マジソンなどと共に最も古い外国茶商の一つである。先出の文芸春秋誌にロバート・ヘリヤ氏が書いた草創期のお茶の再製方法を紹介しよう。

お茶は、長い太平洋の航海に備え、保存をよ

くするため、再焙煎が必要でした。そのため、外国商館には「お茶場」と呼ばれる施設がありました。

煉瓦造りの火鉢に熱い炭火を起

こし、その上に鉄鍋をおいて、

「荒茶」を四十―六十五分焙煎し

たものを「かまちヤ」(Pan fired)

と言い、鉄鍋の代わりに籠を使い、

とろ火で煎りながら乾燥させた

ものを「かうちヤ」(Basket fired)

と言いました。

こうした製法は、本格的なお茶の

製法ではなく、輸出用に用いられ

た独自の製法です。

アメリカに輸入されたお茶の九

割が日本製でした。

横浜神風樓のこと

巴川の河口港だった清水港が、小型ながら蒸気船の発着できる波止場をつくったのは明治十二年。完成式には米国前大統領グラント將軍が来臨し、次郎長は漁師たちを集めて投網の

パフォーマン스로接待した。

静岡茶を横浜へ運んだ蒸気船は静岡丸や清川丸だ。美濃輪の稲荷神社の石欄には、「静岡丸社中」の文字が刻まれている。

明治後期になると軽便鉄道が開通したが、それまでは牛の背中や馬車で、静岡茶を清水港へ運んだらしい。その頃流行った「茶撰り唄」。

お茶の出どころは安西茶町

つくて回すは宮が崎

宮が崎から車に乗せて

牛に引かれて清水まで

清水港から蒸汽に積んで

煙たてたて横浜へ

次郎長は女房のおちように工面させて頻繁に横浜へ通った。横浜の定宿神風樓では、次郎長が着くと、おかみが「ほら、御飯の好きな駿河の親分が見えたよ」と言った。明治の次郎長は、富士開墾などお茶の生産を目指す一方、輸出のために、静岡の商人と横浜の商人を結びつけるのに懸命になっていた。静岡丸、清川丸、三保丸の三隻を保有する資本金八万五千円の子会社「静岡社」が明治十四年に誕生する。筆頭株主は横浜で回漕業駿河屋を営む松平下くらで、発行株式の15%を占める。残されている株主名簿に山本長五郎の名はないが、静岡社の誕生と次郎長の横浜通いとは、小さくない因果関係があったと編集子は推量する。

明治の次郎長が横浜に残した足跡には、まだまだ不明な点が多い。

次郎長が定宿とした神風樓は岩亀樓と並ぶ開化期の大旅館である。三代目おちやうの回想談(使



明治18年、皇国製茶図会。望月秀月画。横浜大棧橋から出帆するお茶輸船。(提供 同)

客寡婦物語」によれば「神風樓の主人久米蔵という人は長五郎と兄弟のようにしていた」という。この山口久米蔵は箱根宮の下富士屋を創設した人（「箱根富士屋物語」）でもあり、次郎長が静隆社とお茶輸出に懸命になっていた頃、最大の支援

平成二十年秋の史跡探訪ツアー

晩秋の京都と愚庵の眠る鹿王院

レポーター

天野 香

平成二十年十一月二十六・七日次郎長史跡ツアーに参加した。

紅葉の美しい京都嵐山は、まさに最高の時期。鹿王院に眠る天田愚庵の墓に詣で、愚庵が京都で過ごした東山三年坂の庵跡を散策する。また東海道と中山道の分岐点として栄えた草津宿の本陣も訪ねるツアーである。草津宿は、次郎長の盟友見受山鎌太郎の出身地でもある。

この日、遠く福島県いわき市から愚庵会の野木安会長、東京在住の野木彌ご兄弟のほか、清水郷土史研究会宿場部会の八名も特別参加。総勢四十五名で出発した。

まず、バスの中で山田健司副会長から天田愚庵についてお話を聞く。

愚庵は十五歳のとき戊辰の役で、父母妹が行方不明となり全国を捜し歩いたが、二度と会うことはなかった。山岡鉄舟の仲介で清水次郎長の養子となったこともある。このとき刊行した「東海遊俠伝」が次郎長伝説の基となっている。後、明治二十年三十四歳で京都林丘寺の滴水和尚の得度を受けて出家し、明治二十五年三十九歳のとき東山

者だった。

清水港の開港は明治三十二年（一八九九）、日本郵船神奈川丸で口火を切ってからの茶輸出は、やがて横浜港を超え、清水港は日本一の茶のみとなった。次郎長の悲願が実ったのである。

三年坂の庵に移り愚庵と号した。歌人としても名が高まり正岡子規・高浜虚子も庵を訪れている。

愚庵は柿が好物で、庵の庭の柿の木は子規の句「柿熟す」で名高い。この柿をいわき市の柳内守一さんが移植され実をつけた。この柿の種子から大きくなった柿の木がさらに、静岡市日本平の里、駿月庵に移植され、正岡子規が詠んだ句「御仏に供へあまりの柿十五」柿熟す愚庵に猿も弟子もなし」の句碑が建てられた。

愚庵の説明も終り、バスは昼ごろ嵐山に到着。竹内会長らと合流し、昼食後は天龍寺を拝観、さらに徒歩で愚庵の墓がある鹿王院に向かった。

鹿王院は足利義満が二十四歳のとき寿命を延ばすことを祈って建てた禅寺で、天竜寺の塔頭に属する。山門には義満の筆「覚雄山」の扁額がある。

山門を一步入ると、黄色や赤に色づいた紅葉に迎えられ、その美しさに目を奪われる。静かな参道の石畳から庫裡に入り、ご住職の案内で廊下を経て墓所に詣でる。五輪のような石碑には、正面に愚庵の辞世の歌、

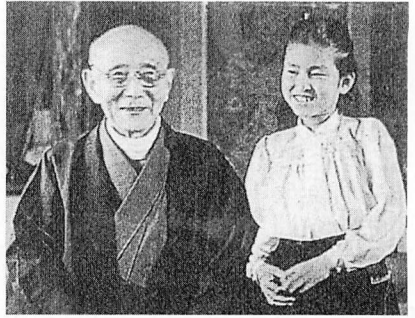
「大和田に島もあらなくに梶緒絶え 漂ふ舟の行



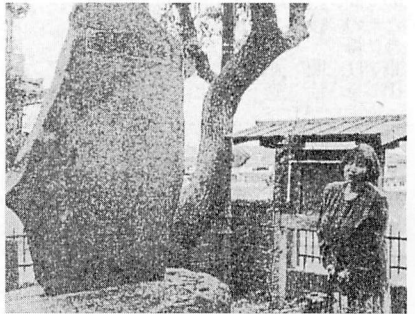
秋の次郎長史跡探訪ツアー 於 鹿王院 2008.11.26

方知らずも」があり、横に両親・妹の法名が刻まれている。愚庵は遺言で「墓を建つことなく埋葬を許さず」と覚え書が残されていたので天龍寺に遺骨は納められていた。愚庵を師と仰ぐ、立命館大学総長・中川小十郎らが発起人となって昭和十一年、愚庵の三十三回忌に鹿王院に塚を建て遺骨も納められた。私は友人とそとと墓碑をなでさせて頂き、深く合掌した。

一日目の日程も終り、臨濟宗総本山妙心寺の花園会館に泊る。翌二十七日早朝、妙心寺法堂にご案内して頂き、堂内の天井絵、八方睨みの龍を拝



昭和28年(1953)小笠原長生と孫の和子さん
伊豆長岡にて(平成20年11月10日 毎日新聞より)



46年ぶりに祖父の書いた石碑と対面する中川和子さん
壮士墓前にて(平成11年11月16日 朝日新聞より)

と思う。有名な舞台をはじめ、境内は勿論、みやげ物屋が連なる参道も大変な混雑である。混雑を縫うように舞台に向かう。全山燃えるような紅葉で、最高の眺めである。

午後は最後の見学地草津宿。江戸から数えて五十二番目の宿場を、市観光ボランティアガイドの

と咸臨丸事件の由来を記した碑文は、小笠原が書き、除幕式には当時小学三年生の中川さんが母親と一緒に代理出席した。平成十一年、中川さんは四十六年ぶりに清水を訪れ、碑と対面、私はその時以来、九年ぶりに草津宿でお目にかかり、本当に懐かしく嬉しかった。そして本陣と一緒に見学した。

本陣はさすが大名が宿泊した大規模なもので、関札や浅野内匠頭、吉良上野介など宿泊者の名を連ねた宿割帳や、文久二年、皇女和宮の御降嫁の記録などが展示されている。草津川に沿って東海道、川を渡ると中山道、川の畔の高札場、火袋付きの常夜灯など見応えがある。中川さんとはここで別れる。

二日間好天に恵まれ、すばらしい紅葉狩りもでき印象に残る研修旅行であった。皆様に感謝し、いわき市の野木会長さんとは再会を期して帰路について。

編集室から

花園会館を八時半出発、きょうは清水寺に近い三年坂の愚庵の庵跡に行く。現在は清水焼きの六六堂の店になっている。敷地内に庵跡の説明板があるが余り知られていない。教えられるければ門を開けて読む人はいないだろう。店主は私たちのために十時開店を特別に早く開けて下さった。見学後は自由散策のため、友人たちと清水寺に行った。京都は何度来ても一番観光客の多いのは清水寺だ

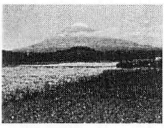
国指定の草津本陣では、大津市在住の中川和子さんが出迎えて下さった。中川さんは幕末の唐津藩主の若殿様、小笠原長生のお孫さんである。海軍中将小笠原長生は、若い頃次郎長の営む船宿末廣にもよく訪れ、次郎長と深い親交があったことと知られる。戦前から戦後にかけて次郎長顕彰会の会長をつとめた。

●三月のある日。東京から中山道生さんが来訪。編集子とは初対面だが、中山さんの祖父は徳川幕臣で明治初年静岡へ移住。小学校の教師や校長を歴任するが、次郎長や子分たちに英語を教えたという。英語塾の貴重な証言かとも思い、

春の日帰りツアーは四月二十七日

●明治の次郎長が精魂こめた富士裾野開墾の跡を訪ねます。さらに標高千メートルの神道天照教本部の境内に残る次郎長手植の桜が見頃。愚庵天田五郎が父母妹の行方を求めた身延山も。

- 日時 四月二十七日八時出発
- 参加費 五、〇〇〇円
- 行先 富士市大淵次郎長開墾神道天照教本部、身延山、富士宮万野が原など



●船宿末廣でゆつくりとお話を聞く。嘉永四年生れの幕臣中山序は、静岡市寺町の感応寺に眠る。二年ほどお休みしていた船宿末廣での「次郎長巷談」が復活します。復活第一回は四月十八日(土)十三時半から。申込は三五二七三三一へ。